

「話せば、分かる....か？」

新製品開発研究所長
石井 將和

ワトソンとクリックによる「DNAの2重螺旋構造」の論文が発表されて50年になります。奇しくも、ヒゲノムの全解析が今年度完了しました。歴史書のもりで、原論文を読んでみました。1953年4月25日付けで「Nature」に発表されたその論文は、We wish to suggest a structure forに始まり、We wish to put forward a radically different structure for.....から佳境に入る訳です。わずかに1000語で書かれているこの論文は、予備知識があるとは言え、簡潔で論旨明瞭であるため、門外漢の私にも分かりやすく、物語を読む気分になります。

研究開発に携わる我々は、日ごろから数多くの論文や報告書と出会います。大部分はワープロや表計算・図形ソフトをはじめとした様々なツールで加工され、見事な体裁を整えて作成されています。それらの内容の軽重とは別に、「分かりにくい表現」に突き当たり、困惑することがしばしばあります。情報処理や伝達の手段が高度に発達した割には、表現への関心が低い研究者が多い様に思います。自身の不明を棚上げにすれば、分かりにくい表現には、どこかに無理・無駄があります。『表現ではない。内容がすべて、話せば分る。』と言う反論は、本当に免罪符になるでしょうか？膨大な情報が、ネットワークを通して利用される昨今では、読者に理解して貰うための工夫も極めて重要です。

当たり前のことですが、Simple & Clear が表現の基本です。作文に悩む技術者のバイブルである「理科系の作文技術(木下是雄)」には「事実と推論を明確に区別する。」をはじめとした有益な指針が述べられています。

研究開発の多くは、上手く行かないことの現実を前に、現象を把握し、仮説と検証の繰返しサイクルを廻し、目標を達成する行為です。ひとつひとつのステップを、言葉によってきちんと総括して足元を固めなければ、確実なスパイラルアップは望めません。ヒラメキや勘を言葉にすることは大変難しいことです。それらを論理的な文章にする(必要なら検証し直す)ことは正に「創造」だと言えます。

ところが、本年度のベストセラー「バカの壁(養老孟司)」を読んで、考えさせられました。すなわち、言葉だけでは伝えられないこと、理解されないことがある。わずかな実験結果からの直感やひらめきを、たどたどしく「言葉」にしたレポートを、「分かりにくい」「理屈に合わない」と芽を摘んだことは無かったか？「壁は我にあり」です。一方で、「話せば分かる」「絶対的の真実がある」と思うことも「バカの壁」とされています。実際、実験データは「事実」ですが、ある現象を伝える「事実の一部」でしかありません。起こっていることを正確に伝えることの難しさ、人によって様々な見方があることは当然です。

本誌「TREND」は、東亜合成の最近の研究開発活動をご紹介します。メッセージや表現の「分かりにくさ」は残っておりますが、広く皆様にご覧戴くことにより、様々な「壁」を越えて、思わぬ発掘がなされることを願っております。

以上